目白大学　総合科学研究
10号　2014年３月　１－８

論文

障害児保育における保育者の熟達化に関する研究の動向

Trends and Issues of Expertise of Nursery Teachers Engaged in Care of Children with Special Needs

廣澤　満之
（Mitsuyuki HIROSAWA）

Abstract

This study examines expertise of nursery teachers engaged in care of children with special needs. Various studies have been conducted on specialty of nursery teachers; however, not many studies have examined this specialty by employing an expertise model. Previous studies included concepts on expertise, which indicate that expertise is acquired through length of experiences. By analyzing previous studies, three problems can be summarized. First, it is important to clarify expertise relevant to the characteristics of various disabilities. Second, it is required to examine alternative factors, except length of experiences, using qualitative analysis because many studies continue to rely on quantitative analysis instead of qualitative analysis. Finally, it is necessary to construct different methods of consultation based on the expertise model using nursery teachers. Therefore, to propose the expertise model on care of children with special needs, the above three problems should be considered.

キーワード：熟達化、保育者、障害児保育
Keywords：Expertise, Nursery teacher, Care of special needs

１．序論

近年、障害児を定型発達児とともに保育する統合保育が広まりを見せている。このような広がりと共に、保育現場ではより障害児保育に関する専門性が求められている。特に、注意欠陥／多動性障害児や自閉症スペクトラム児といった発達障害児に対する支援の必要性が高まっている。また、診断は受けていないが保育者にとって、行動上の気になる点があるいわゆる“気になる子”に対する支援も現場では大きな課題となっている[1)]。

本研究では、障害児保育に携わる保育者の専門性を熟達化という変化過程から捉え、それらに関する先行研究の知見を整理して、その課題を明らかにすることを目的とした。本論では、第一に障害児保育の先行研究の知見を歴史的な背景とともに明らかにする。そして、先行研究を分類して障害児保育に関する研究領域で明らかになっていることを明確にした。第二に、保育領域の研究で近年課題となっている保育者の専門性とは何かという議論を熟達化という視点から捉え、障害児保育の研究領域を捉える視座を得た。第三に、障害児保育の研究領域において、障害児保育を行う保育者の熟達化に関する研究の知見を整理した。これらの検討を行った上で、結論として障害児保育を行う保育者の熟

ひろさわみつゆき：人間学部子ども学科専任講師

達化を捉える研究の今後の課題を明らかにした。

２．本論

（１）障害児保育に関する先行研究の知見

ｉ）1960年代から1990年代

障害児保育に関する研究は、1960年代から散見されるようになった。当時は、保育所に子どもを預けるということ自体に社会のなかで否定的な印象があった。いわゆる三歳児神話が信じられていた時代であり、また、障害児は施設において療育するという考え方が一般的であったため、障害児保育自体が保育のなかで課題とされるような時代背景ではなかった。1970年代に入ると、わずかではあるが障害児保育に関する研究が多くなってくる[2)]。当時の研究は、障害児をどのように保育をするのかということ、すなわち統合のあり方について検討された研究がみられる[3)]。この背景には、障害児保育を取り巻く社会的背景の変化があると考えられる。1974年に障害児保育事業実施要綱が出され、障害児保育の対象となる子どもの条件が示されたことにより、正式に障害児保育の実施が決定された。また、1979年には養護学校の義務化が実施されたことにより、障害児が教育を受ける権利が保障された。このように、障害児が保育・教育を受ける権利が社会に認識されたことにより、障害児保育を研究対象とする必要性が生じたと考えられる。1980年代後半になると、障害児保育に関する研究が以前と比較して多くなる。特に、統合保育の実践とその効果について検討した研究が多くなり[4) 5)]、統合保育の広がりとともに統合保育の質を問う研究が多数行われるようになった。

このように、障害児保育に関する研究は、障害児教育の歴史的な変遷と連動しながら始まり、初期は障害児を定型発達児とともに保育する統合保育自体のあり方を問題としていた。

ii）近年の研究動向

近年の障害児保育に関連する研究は、以前とは異なりさまざまな領域に分化していることがうかがえる。特に、2000年代に入ってからは、全体としての数も多くなっている。近年の傾向を概観すると、障害児保育に関する研究は以下の５つの領域に分けることができると考えられる。

第一に、園内と園外のシステムに関する研究である。これらの研究は、園内体制の構築や園外との連携について検討した研究であり、近年注目を集めている領域でもある。園内体制については、保育者間の協働性や保育カンファレンスの方法に焦点を当てられることが多い[6) 7)]。また、園内体制を有効に機能させるためには、保健センター等との連携を強化することや巡回相談を活用することの意義について指摘されている[8)]。

第二に、機関連携を基礎としたコンサルテーションに関する研究である。これらの研究は、主として巡回相談を含むコンサルテーションの実施状況に関する調査研究[9)]や、コンサルテーションの実践内容[10)]に焦点が当てられている。

第三に、保護者支援に関する研究である。これらの研究は、障害児を育てる保護者が障害児保育に対してどのようなニーズを有しているのかといった視点から検討した研究[11)]に代表されるように障害児を育てる保護者の意識に着目しながら、その支援方法に焦点が当てられている。また、わずかながらではあるが、周囲の定型発達児の保護者が障害児に対してどのような理解をしているのかといった視点から検討した研究も行われている[12)]。

第四に、幼保小連携（移行支援）に関する研究である。これらは、近年特に注目を浴びている研究であり、主として障害児保育を担当する保育者が就学に向けてどのような役割を担うのかといった内容に着目した研究[13)]やサポートファイルを活用するといった就学支援システムの効果について検討した研究[14)]である。

第五に、保育者の専門性に関する研究である。これらの研究は、障害児保育に携わる保育者の専門性の内容について検討した研究である。たとえば、障害に関する知識を保育者が持っているかどうかといった点について明らかにした研究[15)]などをあげることができる。

特に、保育者の専門性に関する研究については、障害児保育のみならず、保育全般について再検討が求められている課題である。2008年に保育所保育指針が改定され、その改定の主要点としては、（1）保育所の役割の明確化、（2）保育の内容の改善、（3）保護者支援、（4）保育の質を高める仕組みがあげられている[16)]。保育者の専門性の向上は（4）に含まれており、保育者個人の資質の向上だけではなく組織として質を向上させることが施設長の職務となったことにより、保育現場での大きな課題となっている。本研究では、近年課題となっている保育者の専門性とは何かという議論について、保育者の熟達化という視点から、その課題を明確化していく。

（2）保育者の専門性を捉える視点としての熟達化

ｉ）熟達化という概念

熟達化（expertise）とは、ある特定の領域において、長期間にわたる経験や練習の結果として、その領域に固有の豊富な知識や熟達した技能を獲得することを示している[17)]。熟達化は、元々チェスやパズルなどの課題を通して、熟達者は初心者と何が異なっているのか、特に方略の差について検討されていた。Chi（1989）によれば、熟達者は、ある領域に関して非熟達者と比較して、早く遂行したり誤りが少なく優秀であることといったことが条件となる[18)]。また、それだけではなく、その技術を遂行するにあたり、課題から一定のパターンを導き出すことができていることも含まれている。さらに、課題について表象することに多くの時間をかけ、その思考過程において自己の行動や方策をモニタリングすることができることも含まれている。このような点を踏まえ、熟達化研究に共通する熟達者の特徴について、梶田（2004）は、①遂行が速く正確であること、②多くの事柄を容易にかつ正確に記憶できること、③ある分野の専門家がその分野で優れていることの３点をあげている[19)]。このように、熟達化は課題遂行の量と質の二つの面における成長と捉えられているといえる。

この熟達化には二つのタイプがあることが指摘されている。Hatano & Inagaki（1984）によると、熟達化には固定的熟達化と適応的熟達化があるという[20)]。固定的熟達化は、Chi（1988）が指摘するような熟達化のように、ある領域において一定のパターンを取得したことによって課題の解決が速くなることである。商品のレジ打ちといった繰り返される課題に対応するのが固定的熟達者である。一方で、適応的熟達化はある一定のパターンを取得した後、そのパターンを臨機応変に変化させて、新たなる課題に対応できることを示す。医師や心理カウンセラーの治療といった一定のパターンを繰り返すだけではなく、個別のクライエントに合わせて知識を応用して対応できるのが適応的熟達者である。

ショーン（2001）は、高次の判断を要する実践を行う専門家の課題解決について、以下の点を指摘している。すなわち、専門家は取り組むべき課題に対して一定の枠組みを与えるが、その枠組みに固定化することがなく、行為を行いながらその問題の解決過程のなかで置かれた状況と対話をしながら、常に新しい枠組みを形成していく思考様式を持っていると述べている[21)]。ショーンが指摘するような課題解決の方法は、Hatano & Inagaki（1984）が指摘する適応的熟達者の概念と近似している。保育者をショーンが述べるところの反省的実践家として捉え直す研究が近年注目を集めているが、同時に適応的熟達者として捉えるといった認知心理学や学習心理学の視点から捉えることも求められていると考えられる。

ii）保育者の熟達化過程に関する先行研究の知見

保育者の専門性については、これまで多くの研究が行われてきた。このなかで、保育者がどのように成長していくのかということを取り上げた研究を熟達化について検討した研究と捉え以下で検討していく。

保育者の熟達化については、経験年数による保育者の変容過程を明らかにした研究がある。堀（1997）は、幼稚園教諭を対象として、経

験年数によって指導方法に関する語りに差異が生じるかについて検討した[22]。対象となったのは、４名の幼稚園教諭であった。子ども同士が関わっている場面を20事例あげ、それに対して、①自分であればどのように対応するか、②似た経験の有無の二点を質問した。その結果、事例に対する回答が一つに収束しやすいものは、ノウ・ハウ的な回答が可能であり初任の教師も長い経験年数の教師と同じような回答が出された。一方で、回答が一つに収束しない事例の場合は、経験年数による差異が認められた。経験年数が長いと時間的展望を見通して指導方法を決定していることが明らかとなった。このように、経験年数の長さは、子どもを捉える視点がより長期的となり、目前で起こっていることへの対処だけではなく、長期的な視点から子どもへの対応を行うことが明らかとなった。

経験年数の長さは、子どもの捉え方を長期的な視点へと変化させるだけではなく、個人差への関心にもつながっていく。高濱（1997）は、保育者33名を対象として、質問紙調査と面接調査を行った[23]。各保育者が指導に困難を感じた事例について、その理解の方法を分類して検討した。その結果、初心者は単一の視点から子どもを捉える傾向があり、経験が長い保育者は複数の視点から子どもを捉える傾向があった。また、経験が長くなると、保育者は子どもの個人差への関心を拡げていくことが明らかとなり、その個人差への関心が子どもを捉える視点や保育行動に影響を及ぼすことが示唆された。

これらの研究が明らかにしたことは、保育経験の長さは子どもを捉える視点の質的変化をもたらすということである。保育経験という量的な変化と子どもを捉える視点という質的な変化に関連があるということである。しかしながら、これらの研究の課題としては、保育経験年数という要因以外に質的な変化と関連のある変数を見出すということが残されていると考えられる。

（３）障害児保育における熟達化に関する先行研究の知見

ｉ）障害児保育の熟達化に関する先行研究の概要

障害児保育を行う保育者の専門性についての研究は、2000年以降多くみられるようになってきた。これは、先述の保育所保育指針の改定に示されている通り、保育領域全体で保育者の専門性を再考する必要性が高まったことと関連していると考えられる。障害児保育の専門性については、山本・山根（2006）が質問紙を用いて、保育者がどのような専門性が身についていると感じているかという自己評価について詳細な検討を行っている[24]。その結果、子どもの行動観察、記録、保育計画といった点での自己評価が高い一方で、インクルージョン、障害児の援助方法やプログラムなど障害に特化した専門的な知識についての自己評価が低いことが明らかとなった。このように、障害児保育に携わる保育者の専門性の一端を明らかにした研究は多いものの、保育者を成長し続ける者として熟達化過程に位置づけた研究は限られている。

実践研究のなかで関わり手である保育者の意識自体を問題とすることはあるものの、保育者自身の熟達化を分析した研究はほとんど行われていない。そのなかでも1990年代から、わずかながらではあるが熟達化を検討した研究が散見される。それぞれの研究は、熟達化という術語は使われておらず、保育者の成長や保育者の専門性という概念によって括られている。本研究では、これら保育者の経験に基づく変容過程を熟達化と捉えて、以下で検討を加えていく。

熟達化について検討した研究は３つに分類される。第一は、自らの専門性や障害児保育に対する態度といった認識を検討した研究である。第二は、保育者による子どもの捉え方の成長過程を明らかにした研究である。

ii）障害児保育に携わる保育者の専門性や障害児保育に対する理解に関する研究

佐藤・岩切（1989）は、障害児保育に対して保育者がどのような理解をしているのかについて検討するなかで、保育経験と保育者の理解

との間に関連があることを示した[25]。対象となったのは、幼稚園教諭499人であった。質問紙調査が行われ、障害児の幼稚園への受け入れに対する考え方や障害児保育に対する考え方、障害児観、障害児を育てる保護者をどのように理解するかといった広範な項目について質問した。その結果、保育者の年齢が高く、保育経験が長いほど障害児を幼稚園に受け入れることに対して好意的な態度を示していたことが明らかとなった。また、年齢が若く、保育経験が短い保育者ほど、自分に自信がないため受け入れることが難しいと考えていること（消極的拒否）が明らかとなった。さらに、障害児を担任した経験のある保育者では、消極的拒否が平均としては少なかったが、高低に二分化していることが示された。これらのことから、保育経験が短いと障害児保育を行うことに不安がある一方で、担任を経験して保育経験を積み重ねた保育者のなかにも不安が高い者がいることが示された。この研究は、障害児を担任した経験が必ずしも障害児保育に対する不安を軽減することにはつながらず、保育者によって差異が生じることを示したという点で重要である。すなわち、保育者の熟達化は全ての保育者が共通した過程をたどるのではなく、少なくとも障害児保育に対する認識については異なった過程が存在することを明らかにした。この研究の課題としては、このような差異がどのような要因によってもたらされているのかという点についての質的な検討の必要性があげられる。

扇子ら（1996）は、障害児保育を担当した保育者の経験がもたらす保育者の専門性の向上に着目した[26]。57人の保育者に対して質問紙調査を行い、障害児保育の経験がもたらす困難や挫折の内容、自分にとってプラスになったことを質問した。その結果、障害児保育を経験することは、他機関との連携への意識を高めること、過去の経験を活かすことへの意識を高めることを明らかにした。また、扇子ら（1996）は、質問紙調査の結果を補完するために6名の保育者に面接調査を行った。その結果、障害児保育の経験が長くなると、障害児への対応といった直接的な支援の必要性を感じる段階から、保護者をどのように支えるかといった間接的な支援の必要性を感じる段階へと移行していくことを明らかとした。また、障害児保育の経験が定型発達児の保育にもプラスの影響を与えていることを指摘した。この点については、扇子ら（1999）はさらに詳しく検討を行っており、障害児保育の経験は保育に対するやりがいに繋がっていることを指摘している[27]。このように、障害児保育を経験することによって、支援の視点が変容することが明確になることや、定型発達児の保育への影響が出ること、さらには保育へのやりがいへの効果といった障害児保育という枠組みではなく、保育という広い枠組みで熟達化を捉えたことに意義を見出すことができるであろう。

佐藤・岩切（1989）や扇子ら（1999）は、障害児保育が保育者の専門性に与える影響について検討をしていた。それに比べて、石井（2009）は障害児保育が「障害のある子」「健常児」「保育者自身」に与える影響を保育者はどのように判断するのかについて検討した[28]。その結果、障害児保育が障害児に与える影響については、担任経験よりも障害児保育の経験年数に依拠しており、経験年数が短いほど障害児にはポジティブな影響があると判断していた。逆に、経験年数が長いほど、ポジティブには判断せず、障害児保育の効果を客観的で冷静に捉えていることが明らかとなった。さらに、障害児保育の経験年数が短い方が障害児保育に対する不安が高く、障害児に対して多くの配慮が必要であると感じていることを示した。このように、障害児保育の経験が与える影響は、保育者自身の熟達化だけではなく、障害児保育が障害児に対してどのような影響を与えるのかという評価についても保育者自身の認識は変容していくことが明らかとなった。

iii）保育者による障害児の捉え方を検討した研究

障害児保育に対する理解や認識に関する熟達化を検討した一連の研究がある一方で、保育者が障害児をどのように認識するのかという視点の変容過程を捉えた研究の一群がある。

東（2000）は、１名の統合保育を担当している保育士を対象として、保育者の障害児に対する認識を変容させることによって、実際の子どもとの関わりが変容するかという点について検討した[29]。保育士に療育の専門家が対象となる子どもと関わっているビデオを見せ、その専門家が子どもの現状についての解説を行った。そして、実際に保育士が対象児と関わった結果、ビデオを見る前と後では、対象児に対する評価がコミュニケーションをとることができないといったものから、働きかけを工夫すればコミュニケーションをとることが可能であるという認識に変化した。一方で、実際の相互作用は、保育士からの始発行動が増えたが、相互作用とはなりづらかった。このことから、保育士が障害児をどのように捉えるかということが実際の行動を変容させるのではなく、子どもの行動といったフィードバックが重要であることが示唆された。このように、短期間での学習効果を検討する研究がある一方で、保育者が子どもの理解をどのように変容させていったのかということを長期間にわたり捉えた研究がある。

財部（2002）は、１名の自閉症児（現在は自閉症スペクトラム児）を対象として、その子どもに対する保育者の４年間の認識の変化を検討した[30]。保育者に対しては、「子どもについて」「子どもに接する私」という二つの側面から質問を行い、子どもに対するイメージ構造についてPAC分析を用いて明らかにした。その結果、保育者の認識は、１年目には戸惑いや不安が高く、２年目は焦りや苛立ちが中心であった。３年目になると気づきと理解、４年目になると理解の深まりと受け入れといった保育者の認識の変容が明らかとなった。実際の保育者の行動としても、当初は保育者の意図に巻き込むことを中心とした働きかけであったが、後半になると子どもの行動の意図に沿った行動をとるように保育者自身が変容していた。財部（2002）は、障害児が保育場面において行動の変化を見せるのは、保育士の子どもの捉え方が大きく影響することを指摘しており、その捉え方の変化には巡回相談といった外部機関との連携も影響していることを示唆している。

これらの研究が示しているように、保育者が保育現場で実際の行動を変容させるためには、保育者自身が子どもの行動をどのように理解するのかという点が重要である。このような理解の変容をしていく保育者こそが、Hatano & Inagaki（1984）が述べるような個別のクライエントに合わせて知識を応用して対応する適応的熟達者といえるであろう。しかしながら、先行研究では、少数の事例による変容過程を明らかにしているが、一般化されているとは言い難い点が大きな課題となっている。

この課題について、障害児保育の経験を要因として検討した研究がある。小川（2000）は、保育者77名を対象として、コミュニケーションに困難をもつ子どもの事例を使用した実験的研究を行った[31]。子どもの事例に対して、保育者は何がその子どもの行動の原因（「状況理解困難」「情緒不安定性」「社会性の問題」）であるのかということを答えることが求められた。その結果、事例に対する原因解釈に関して保育者の考え方が二分化されたことが明らかとなった。二分化されたそれぞれの群の要因を検討した結果、通常の保育経験歴や障害児保育経験歴、障害児保育に関する研修歴による差は認められなかった。すなわち、障害児を理解する枠組みは、保育経験年数といった量的指標によって単純に説明可能ではないことを示唆しており、経験年数のような量的指標とは異なる質的要因が関係していることが考えられた。

このように、障害児保育に関する熟達化を扱ったと考えられる研究を概観すると、障害児保育に対する考え方は、保育経験年数に依拠しているとする結果がある一方で、小川（2000）のように経験年数から一概に結果を導き出すことはできないという知見もある。すなわち、障害児保育に携わる保育者の熟達化は、保育経験年数によって影響を受ける領域とそうではない領域が存在することが示唆され、それらを特定して、分離して検討していくことが本領域の課題であるといえるであろう。

３．結論

先行研究を概観すると、障害児保育における

保育者の熟達化に関する研究の課題は以下の三点にまとめることができると考えられた。

第一に、保育者の熟達化と子どもの障害の特性との関連を検討する課題である。障害児保育に携わる保育者の熟達化を検討した研究の多くは、熟達化に伴って保育者が障害児をどのように理解するのかについて焦点を当てている一方で、熟達化と障害特性との関連は未検討であった。小川（2000）も指摘しているように、子どもの臨床像の解釈によって保育者は異なった対応を行うと考えられる。すなわち、熟達化によって対象となる子どもをどのように捉えるのかということに保育者間の差異が見いだされる可能性ある。障害の診断名の有無が保育者の支援方法に影響をもたらすということを明らかにした研究があることからも[32]熟達化と障害特性との関連を検討する必要があるであろう。

第二に、経験年数以外の要因を質的に検討する課題である。熟達化を扱った先行研究の多くは、保育経験年数や障害児保育の経験を要因としてあげていた。しかしながら、この点に関しては二つの課題があると考えられる。一つ目は、そもそも熟達化がある一定の道筋をたどるのかという問題である。先行研究の多くが熟達化を一方向への質的変化として捉えている。適応的熟達者は、個々のケースへの臨機応変な対応によって熟達化していくのであれば、保育者間に差異があることは明らかであり、その差異をモデル化する必要があると考えられる。先行研究の課題は、熟達化のモデルを複数想定していない点にあると考えられる。二つ目は、初心者の問題である。これまでの熟達化研究は、経験年数を重要な変数として位置づけていた。養成校を卒業してすぐの保育者は、経験年数で考えれば１年目である。この地点を熟達化の始まりとして捉えて良いのかという問題点である。保育者となった時点より以前の養成教育のみならず、様々な経験により、初心者である時点で少なからず保育者間の差異が生じている可能性があると考えられる。すなわち、初心者とは何かという問題が整理されないまま検討が加えられているという課題がある。養成教育の意義を明らかにするためにも熟達化の視点を保育者以前にまで拡げる必要があると考えられる。

第三に、障害児保育に関する熟達化モデルをコンサルテーションといった実際の支援に応用する課題である。これまでの研究は、熟達化とは何かというモデルの構築に焦点が絞られていた。そのため、熟達化のモデルがどのように現場で応用されるのかという点にまで拡がっていなかったと考えられる。巡回相談や保育コンサルテーションでは、外部機関の専門家が保育者と協働で問題解決を目指していく。その際に、先行研究が指摘するように保育者の熟達化によって子ども理解が異なるのであれば、保育者の熟達化に合わせて子ども理解を促す専門家の支援のあり方が求められると考えられる。また、職場のなかで保育者をどのように育てていくのかといった課題やリカレント教育のあり方を考える上では、保育者の熟達化に合わせた支援が求められているであろう。このように、障害児保育に携わる保育者の熟達化モデルを基盤とした具体的な支援の方略を検討していくことが今後の課題として求められていると考えられた。

【引用文献】

１）郷間英世、圓尾奈津美、宮地知美、池田友美、郷間安美子、幼稚園・保育園における「気になる子」に対する保育上の困難さについての調査研究、京都教育大学紀要、**113**、pp.81-89、（2008）

２）佐藤俊子、保育所・幼稚園における障害児の実態について、大阪府立公衆衛生研究所研究報告 精神衛生編、**11**、pp.41-48、（1973）

３）沖津圭子、保育所における障害児保育－混合保育の実践をとおして、藤女子短期大学紀要 第２部、**14**、pp.45-60、（1976）

４）太田光世、統合保育における健常児と障害児の関係行動の変容過程、情緒障害教育研究紀要、**5**、pp.29-32、（1986）

５）本郷一夫、統合保育所における障害児に対する保母の働きかけの効果について―再現性の検討と数量化Ⅱ類による分析、東北大学教育学部研究年報、**37**、pp.71-95、（1989）

６）松井剛太、七木田敦、統合保育における保育カンファレンスの方法とその効果：グループインタビュー法を用いた障害児の個別支援計画作成に関して、小児保健研究、**64(3)**、pp.469-475、

（2005）
7）大村禮子、保育の場における発達支援：協働体制の確立に向けて、淑徳短期大学研究紀要、**49**、pp.141-159、（2010）
8）真鍋健、障害のある幼児に関する保育所巡回相談の評価―Ｘ市における保育者と保育コーディネーターへの質問紙調査より、幼年教育研究年報、**32**、pp.43-52、（2010）
9）荻原はるみ、保育園・幼稚園における発達障害児の実態調査および専門機関による巡回相談の現状―Ｎ市とＴ市を中心に、研究紀要、**30**、pp.155-165、（2008）
10）浜谷直人（編）、保育を支援する発達臨床コンサルテーション、（ミネルヴァ書房、京都）、（2002）
11）三村保子、白石隆子、障害をもつ幼児の親が交流保育に期待すること、西南女学院短期大学研究紀要、**47**、pp.77-83、（2000）
12）小林真、中山史子、統合保育に対する健常児の保護者の意識、とやま特別支援学年報、**1**、pp.41-48、（2007）
13）田所摂寿、幼児期における発達障害児への支援の実際（2）就学へ向けての幼稚園教師、保育士の役割、明治学院大学心理学部付属研究所年報、**2**、pp.65-80、（2009）
14）松井剛太、障害のある幼児の就学支援システムの構築：サポートファイルの活用による小学校への接続の試み（第１部自由論文）、保育学研究、**45(2)**、pp.191-198、（2007）
15）長尾愛子、保育所における障害児保育の専門性と保育体制、今治明徳短期大学研究紀要、**25**、pp.33-44、（2001）
16）厚生労働省、幼稚園教育要領・保育所保育指針、（チャイルド本社、東京）、（2008）
17）丸野俊一、プロとしての教師への道のり－１－熟達化研究からの提言、児童心理、50（2）、pp.264-275、（1996）
18）Chi, M. T., Hutchinson, J. E., & Robin, A. F., How inferences about novel domain-related concepts can be constrained by structured knowledge, Merrill-Palmer Quarterly, **35(1)**, pp.27-62,（1989）
19）梶田正巳、熟練教師の知、授業の知　学校と大学の教育革新、（有斐閣、東京）、pp.181-198、（2004）
20）Hatano, G., & Inagaki, K., Two courses of expertise, Research & Clinical Center for Child Development, **82-83(Ann Rpt)**, pp.27-36,（1984）
21）ショーン、D、専門家の智恵、（ゆみる出版、東京）、（2001）
22）堀淳世、幼稚園教諭が語る指導方法―経験年数による違い―、保育学研究、**35(2)**、pp.280-287、（1997）
23）高濱裕子、保育者の保育経験のいかし方―指導の難しい幼児への対応―、保育学研究、**35(2)**、pp.304-313、（1997）
24）山本佳代子、山根正夫、インクルーシブ保育実践における保育者の専門性に関する一考察:専門的知識と技術の観点から、山口県立大学社会福祉学部紀要、**12**、pp.53-60、（2006）
25）佐藤曉、岩切靖浩、幼稚園における障害児保育に対する保育者の態度、鹿児島経済大学社会学部論集、8(**2**)、pp.1-16、（1989）
26）扇子幸一、武藤有紀子、飯浜浩幸、伊藤則博、障害児保育を通した保育者の成長、札幌大谷短期大学紀要、**28**、pp.79-108、（1996）
27）扇子幸一、飯浜浩幸、伊藤則博、障害児保育担当者の意識と成長、教育実践研究指導センター紀要、**18**、pp.11-22、（1999）
28）石井正子、統合保育に関する保育者の認識―保育経験及び障害児担任経験が与える影響の分析、昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要、**18**、pp.51-64、（2009）
29）東俊一、統合保育実践における保育者の認識による関わりの変容、新見公立短期大学紀要、**21**、pp.55-63、（2000）
30）財部盛久、統合保育における自閉症圏障害児の行動と保育者の子ども理解、琉球大学教育学部障害児教育実践センター紀要、**4**、pp.29-49、（2002）
31）小川巌、臨床像の解釈に及ぼす障害児保育経験の効果：コミュニケーション困難をもつ一幼児の文章事例を用いて、島根大学教育学部紀要　教育科学、**34**、pp.19-23、（2000）
32）水内豊和、青山仁、村上直也、高正淳、枡田篤史、松井理納、築尾むつみ、辻亜弓、自閉症という障害の診断名の有無が保育者の支援方法に及ぼす影響、富山大学人間発達科学部紀要、**2**、pp.145-154、（2007）

本研究は、独立行政法人日本学術振興会の科学研究費助成事業「若手研究Ｂ」（研究代表者：廣澤満之、課題番号25780487）の助成を受けた。